

86章：スコットランド人の盟約

- (1) 代表団の組織化・・・2
- (2) 盟約へ・・・10
- (3) その反応・・・17
- (4) 盟約派の動き・・・21
- (5) チャールズの動き・・・25
- (6) ハミルトン登場・・・28
- (7) ハミルトン、スコットランドに到着する・・・32
- (8) ハミルトン、エディンバラに入る・・・36
- (9) ハミルトン、帰英の話をする・・・40
- (10) 国王の宣言書が読まれる・・・41
- (11) 盟約派からの代表団・・・43

(1)代表団の組織化

(10月19日、トラケアーの提案)

トラケアーのような実際的な感覚の持ち主にとって、民衆の代表の指名のあとのスコットランドの様相は、まことに憐れむべきものであった。彼はこう書いている。

「私は万事において置いてけぼりにされてしまいました。神が私の証人です。どうすべきかこれほど迷われていることはありません。私は人民の怒りに譲歩すべきなのでしょう。その怒りたるや、強硬な手段なくしては抑え切れるものではありません」と。彼にとっては、妥協はもはや不可能であることを信じることは難しかった。彼はロシスに尋ねた。汝らはどうしてイングランドの祈禱書をそのまま受け入れることに同意できないのかと。ロシスはその言葉に耳を貸そうとしなかった。ロシスの決定は人民の決定であった¹⁾。

(11月15日、代表団の組織化)

11月15日、請願者たちがエディンバラに戻ってきた。彼らの代表は急いで選ばれたので、それはより永続的な組織に道を譲らなければならなかった。その組織は、貴族から2人かそれ以上、各シャーから2人のジェントルマン、各自治都市から1人の自治都市民、各長老会から1人の牧師から成り立っていた。トラケアーは自分の手から権力が抜け落ちていくのを見て、熱く抗議をした。しかし、長老派の法務長官サー・トーマス・ホープが、「彼らは自分たちの権利のうちで動いているのである」と意見を述べた。そして、これ以上の抵抗は無理であった²⁾。

(スコットランド、回答を待つ)

代表団を組織したうえで、スコットランドは焦らずに回答を待った。もしもチャールズが（ちょうどエリザベスがかつて専売特許権を放棄したように³⁾）すんなりと祈禱書を放棄していれば、彼は主教の権威をいくらかでも残すことができたかも知れない。彼は自分の意図を率直に伝えることを決心することすらできなかった。

1) 原注：Traquair to Hamilton, Oct. 19, *Hardwicke S. P.* ii. 95. *Roths*, 22. (*HE8*, 325)

2) 原注：*Ibid.* 23. (*HE8*, 325)

3) ref: Elton, *England under the Tudors*, pp.464-465 ; 山川イギリス史2 , pp.106-107.

(12月7日、リンリスゴーにおける布告)

12月7日、リンリスゴーで出された布告は(リンリスゴーには国王に従い、今や枢密会議がそこに所在していた4))、「エディンバラで起こった騒擾のために嘆願書に対する回答は遅れるであろう」と述べてあった。チャールズの言い分は、自分はローマ・カトリックが大嫌いであるということと、スコットランドで「現に述べられている」ような真の宗教の推進に資さないことは何も同意するつもりはないということであった。布告は最後に次のような言葉で終わっている。「陛下の生まれ故郷である国の賞賛すべき法に反することは、何も行われることが意図されたこともないし、今もされていない」と5)。

(12月8日)

スコットランド人は、その賞賛すべき法が破られたという点で、ほとんど満場の一致を見ていた。トラケアーは、国王を懐柔することを求めた。すなわち、エディンバラ・シティの代表団がホワイトホール宮殿の国王のもとに赴き、ごく自然なこととして、町の勅許状と門の鍵を王に差し出すのである6)。

(12月21日、嘆願書と裁判権辞退書)

しかし、代表団は彼の提案に耳を貸そうとしなかった7)。国王がいかなる立法機関の許認も受けることなく、礼拝形式を変更することが果たしてスコットランドの法に合致していることなのか否か、きっぱりと結論をつけなければならなかった。

(12月21日、枢密会議に主教が残留していることに対する抗議)

4) ref: 本書 86 章 (枢密会議と最高民事法廷は移転すべし)

5) 原注: Proclamation, Dec. 7, *Large Declaration*, 46. (HE8, 326)

6) 原注: *Roths*, 43. (HE8, 326)

訳注: つまり、トラケアーは、町は国王を怒らせてしまったと認識している。(そのために国王は、町から枢密会議と最高民事法廷を移転させることを決定した。) だから、国王に今一度臣従の態度を見せれば、国王はきっと赦してくれるという案。

7) 原注: Bill and Declinator, Dec. 21, *ibid.* 50. (HE8, 326)

10月に起草されていた一般嘆願書の写しが、ついに12月21日、枢密会議に対して代表団によって手渡された。これには、「自分たちと主教との間の問題は司法の場で解決されてほしい」、「主教はその間枢密会議から取り除かれるようにしてほしい」との正式な要望書もついていた8)。

(1638年2月、トラケアー、ロンドンに)

間もなく、チャールズはトラケアーを呼んだ。彼自身の口からスコットランドの現状に関して意見を聞くためであった。チャールズがこの冷静で、私情をはさまないアドバイザーのいうことにもっと真剣に耳を傾けていればよかったのだが。財務長官は王に、スコットランド人民は王の権威を否定するつもりはないと保証した。ただ、自分たちの宗教が損なわれているときにそれを黙って見過ごすつもりもないのだと。とりわけ人民は自分たちの古来よりの独立を誇りに思っています、人民はカンタベリー大主教の命に従うつもりはありませんと9)。陛下は、もしも新祈禱書がスコットランドで読まれることをご所望あそばされるならば、そのために4万の兵を用意しなければならないということを率直に理解されなければなりませんと。

新祈禱書を撤回し、世俗の権威を主張せよというのがトラケアーのアドバイスの要旨であった。チャールズは耳を傾けてはいたが、納得はしなかった。トラケアーは、事実上の宣戦布告となる宣言を發布するようにとの命令を受けて、帰国させられた10)。

(2月19日、国王、新祈禱書を擁護する)

8) 裁判権辞退書といているが、要するに、拒絶書である。主教は本裁判の当事者なので、主教が裁判官をやっているのはおかしい、だから、除けてほしいといているのである。(ref: *Garner's Dictionary of Legal Usage*, 'declination', p. 252)

9) 原注: Zonca to the Doge, Jan. 19/29, Feb. 2/12, Feb. 23/March 5, *Ven. Transcripts, R. O.* (HE8, 327)

10) 原注: 「侯爵はもっともよい証言者になって下さいます。すなわち、私がどれだけ喜んでいなかったかを。すなわち、陛下がこのような布告を発したことを。そして、私はあまりにも正しい理由をもっているのです、これから後に続く危険や不都合を予見できません」。Traquair to Hamilton, March 5, *Hardwicke S. P.* ii. 101. バートン氏は、彼がその布告はトラケアーが与えたアドバイスのトーンにおいて、あまりにも近すぎると書いたとき、この一節を見逃していたに違いない。*Hist. of Scotland*, vi. 477. (HE8, 327)

その布告は2月19日、スターリングの町中で読み上げられた。(当時、枢密会議はリンリスゴーより立ち退いたあと、遠くダンディーに移るよりもスターリングに移ることを許可されていた。)チャールズは本当に、自分が(すなわち主教ではなく)新祈禱書の発行に対して責任を負っていると強く主張した。彼はいう。「私は、私がすでに信仰を表明している真の宗教¹¹⁾の護持という王としての懸念から、また、すべての迷信を打破するために、共通祈禱書の編纂を命じて、私の古きスコットランド王国の臣民の一般的使用と啓蒙に供しようとしたのであり、それゆえに上記のこと¹²⁾が行われたのである。その遂行において私は大いに心を揉み、苦労を重ねたので、私が見て承認したもの以外は、そこでは何も通らなかった。その後、それは外部に漏れ、または印刷され、私はすべての愛する臣民に対して、私の意図だけではなくまさにその祈禱書までもが、私がすでに信仰を表明した真の宗教を護持し、迷信を打破するための即使える手段となることを保証するのである。そして、それが私の時代において、臣民を満足させるための正道であると信じて疑わない」と。また彼は続けていう。彼の王としての権威は、自分のもとに送られてきた請願と宣言書によって痛く傷つけられた。それらに関与したすべての者は、自分の許可なく集まった者として、その身と財産の両方において厳しい断罪を免れないと。しかし、王は彼らの過ちを見過ごしてもいいとも思っていた。すなわち、もしも彼らがすぐに家に帰り、これ以上集まることを慎むのであれば。そして、もし従わなければ、反逆罪としての処罰は免れないと¹³⁾。

(抗議)

チャールズには、たとえ彼自身が新祈禱書に満足していても、なぜ他の者は満足しないのかがわからなかった。彼は、「新祈禱書には法的裏付けがない」という異論を軽く、蔑んでしか扱わなかった。しかし、スコットランドのリーダーたちは、それだけますます法的形式にこだわった。国王の伝令官が布告を読み終えると、ジョンストンが一步前へ進み出て、リーダーたちの名において布告に対する抗議を行った。すなわち、彼らは、その布告を枢密会議だけで作られたものとして扱っていた。そして、主教が枢密会議に座を占めている限り、同会議の命令は受けつけないと告知した。彼らの要求は、自分たちの「聖なる主権者を頼り、自分たちの不満を呈示し、法的なや

11) 私がすでに信仰を表明している真の宗教：つまり、プロテスタント。

12) 上記のこと：共通祈禱書の編纂

13) 原注：Proclamation, Feb. 19, *Large Declaration*, 48. (HE8, 328)

り方で、そうした不満を世俗の裁判所においてであろうと教会裁判所においてであろうと、通常の有能な裁判官の前で追及すること」であった14)。

(ロシスの回覧状)

この法に対する訴えがチャールズに対して効果をもつには、それが国民に対する訴えによって支えられていなければならなかった。ロシス（彼はそのエネルギーと決断力によってこの動きの先頭に立っていた）は、これまでのところまだその大義を支持していなかったジェントルマンたちのもとに回覧の手紙を送った。そして、一刻も早くその大義に彼らの支持を与えるように促した。

(テーブルがセットされる)

次にやるべきことは、組織化の仕事を終わらせることであった。11月に任命された代表団は、中央権力として行動するにはあまりにも組織として大きすぎた。時折、選ばれた委員会が枢密会議とコミュニケーションを交わすために任命されてきた。この委員会は、当然のことながら、国民が構成される異なる階層からその委員が選ばれてきた。今、4つの委員会が発足させられた。すなわち、一つは、出席するかも知れないすべての貴族から成る委員会。他の3つは、4人のジェントルマンから成るもの、4人の牧師から成るもの、4人の自治都市民から成るものであった。これらの委員会は、別々に会合を開くこともできれば、一堂に会して会合を開くこともできた。時としてそれらの一つ一つの委員会に対して、また時としてより大きな委員の集まりに対して、当時の民衆言葉で「テーブル」という名が与えられた15)。

14) 原注：Protestation, Feb. 19, *ibid.* 50. (HE8, 328)

15) 原注：「テーブル」の正確な意味に関する疑問は、答えるのが容易でない。ローはこの名によって代表団について語っている。(Hist. of the Kirk, 486) ゴードン（彼はバートン氏によって追従されている）は、代表団と委員会を混同している。Large Declaration は「テーブル」の任命をこの日としている。ただし、貴族の数を4人に限定している。筆者はロシスに従う。その Relation において、「テーブル」の漸進的な発展をたどることができる。代表団は11月15日に選ばれた。(p. 23) 11月16日に13人が枢密会議を訪れるように懇請された。(p. 26) 18日には、ジェントルマンのうち6人および自治都市の代表の幾人かがエディンバラに残った。(p. 32) 12月、6、7人の貴族が他の階層のそれぞれから出た4人と出会い、枢密会議との連絡を保とうとした。(p. 34) 12月19日には、この職務を行っているのは12人だけである。(p. 38) 2月22日には、「4人のバロン、4人の自治都市民、4人の牧師から成る選ばれた一つ

(2月23日、国民へのアピールが必要)

こうした委員会は、権威付けのなされていない政府を形成したかも知れない。そして、委員たちは権威付けのなされていない議会であった。しかし、もっと多くのことがなされない限り、彼らは自分たち自身の名においてしか発言しないであろう。ロシスの巡回状ですら、上層階級にしか宛てられていなかった。もっと大衆の心に触れることが必要であった。教会が主教によって支配されようが長老によって支配されようがどうしてもよい大多数の人々は、自分たちの礼拝に対する介入を脅かされたことに深く傷ついていた。彼らの言葉にはなっていない不満を明確な力に変えるための計画が、アーチボルト・ジョンストンから提案された。

の委員会が貴族たちと合流することになる」とある。(貴族たちの人数は明記されていない。) (p. 69) これが最終的に取られた形であったようだ。6月9日の重要な会合では (p. 146)、6人の貴族が出席している。(HE8, 329)

(2)盟約へ

(1581年の盟約を更新する提案)

生命や財産が必ずしも法律によっては守られない時代において、スコットランドの貴族とジェントルマンは互いに「バンド (band)」、すなわち、相互防衛義務を結ぶ習慣があった。1581年、スコットランドがスペインからの支援の約束によって支えられていた国内のカトリック貴族の連合によってその存立を脅かされていたとき、ジェームスはすべての忠良な臣民に呼びかけて、そのようなバンド (band)、すなわち、盟約 (covenant) を結ぼうとした。この盟約に署名した者は、ローマ・カトリック教会の教義を放棄し、スコットランド教会の規律に服し、己の職業と力によって同教会を守ることを約した。ジョンストンとヘンダーソンは、この盟約に、実情にあった追加条項を加えることを任された。それによってそれを回覧し、上層階層の抵抗と運命を共にしようと願うすべての者によって署名されるようにするためである。

(2月27日)

ジョンストンとヘンダーソンが作業を終わらせると、すぐにそれはロシス、ラウダウン、バルメリーノによって修正された。そして、2月27日、それは当時たまたまエディンバラにいた200人から300人の牧師の前に置かれた¹⁶⁾。

(盟約に追加された内容)

追加された内容は、第一に、長老派が栄えた頃に議会を通過した法からの一連の長い引用から成り立っていた。しかし、人々の心の琴線に触れるようになるためには、もっと何かが必要であった。まもなく国中のコテージに送り届けられることになる言葉は以下の通りであった。

「下記に署名する我々、貴族、バロン、ジェントルマン、自治都市民、牧師、平民は、我々の最近の嘆願、苦情、抗議の中で一般的に含まれている、または、個別に言及されている数多くの革新および邪悪によって、真に改革された宗教、国王の名誉、王国の公安が危険にさらされていることを、以前に幾度も、また、とくに今のこの時に考慮し、ここに公言する。または、神とその天使、世界の前で厳粛に宣

16) 原注：Rothes, 69. (*HE8*, 330)

言する。すなわち、我々は全身全霊をかけて、生きている間中いつも、上記真の宗教を信奉し、護持し、そして、（聖職者集会や議会において試金石にかけられ許されるまでは、礼拝問題においてすでに導入されたすべての改変事項の実施を控え、また、教会の公的統治の腐敗もしくは聖職者の世俗的地位、権力の承認を控え（17）、）あらゆる合法的な手段を尽くして、福音の純粹性と自由を回復し、上記改変がなされる前に確立され公言されていた状態に戻そうと努力することに合意し、決定した。

また、我々はしかるべき吟味を行ったのち、我々の嘆願、苦情、抗議の中に含まれている変革および邪悪は、聖書の中に根拠をもっておらず、また、上記信仰告白の条項、および、スコットランドの宗教改革者の意図、言わんとするところ、また、上記議会法に反しており、さらに、ローマ・カトリック教の再確立、および、真に改革された宗教と我々の自由、財産、法の破壊をはっきりと目指していると率直に認識し、疑いなく信じているので、我々は以下のことも宣言する。すなわち、上記信仰告白は、上記改変と邪悪の一つ一つがそこに表現されているのとまさに同じように解釈され、理解されなければならない。そして、その中で棄てることが宣言されているローマ・カトリック教のほかの個別の条項の中で、それらを忌み嫌わなければならないと。

それゆえに、我々の神に対する義務、および、国王と国に対する義務を知り意識しているところから、いかなる世俗的な関心または誘因もなしに、弱い人間が耐え忍ぶことができる限り、その効果のために神のさらなる恩恵があることを願いながら、我々は、主、我々の神の偉大なる名にかけて、上記宗教に対する信仰告白を守り、それに対する忠順を続けていくために、約束し、誓うのである。すなわち、我々は、我々に対する召命に従って、神が我々の手にお与えなさった力を最大限に生かしながら、一生を通して、上記宗教を守り、それに対するすべての誤謬と腐敗に対して抵抗していくと。

そして、これと同じように、同じ精神によって、我々は神と人の前で宣言するのである。すなわち、我々は神の不名誉や、国王の偉大さと権威の縮小に結びつくようないかなることも、試そうという意図もなければ願望もないということ。

しかし、逆に我々は、上記真の宗教と諸々の自由と国法を守るにおいて、我々の財産、生命をかけて力の及ぶ限り、恐れ多い我々の主権者、すなわち国王陛下、その身体と権威を支持し守ることを約束し、誓うのである。また同様に、あらゆる人物から、我々の最高の助言、我々の体、財産、すべての力でもって、真の宗教と国王陛下を護持するという同じ大義の中で、我々自身が互いに防衛し助け合うことを

17) ref: *Donaldson*, p. 314.

約束し、誓うものである。その結果、その大義のために我々の最小になされることは、どんなことでも我々全体および我々の一人一人になされたものとして見なされるのである。また、我々は直接的にも間接的にも自分たちが分裂させることを許さないであろう。もしくは、いかなる提案や連合、誘惑、または恐怖によっても、この祝福された忠誠心から出た結合から撤退させられたりはしないであろう。また、共通の同意によって、非常によい目的につながっていくと考えられているいかなる決断をも停滞させるような、または、妨げるような障害、妨害を投じないと約束し、誓うものである。

逆に、あらゆる合法的な手段によって、上記を助長し、推進することを約束し、誓うものである。そして、もしそのような危険で分裂的な動きが言葉や命令によって我々になされるのならば、我々は一人一人に至るまで、それを押さえつけようとするだろう。あるいは、必要とあれば、上記を知らせずにはいられないだろう。すなわち、それがちょうど都合よく未然に取り除かれるように。

また、我々が行うことは、十分に根拠に基づいていることであり、我々自身と我々の子孫の共通の幸福のために、神に対する信の礼拝、国王陛下、王国の平和を護持しようとする偽りなき願望から発せられたものなので、反乱や同盟や、敵がその悪知恵と悪意から我々に課そうとするほかのすべての汚い野心をも恐れないのである。

そして、我々は、神との契約を更改したキリスト教徒にふさわしい生活と会話を信仰告白と署名に結び合わせる事しか、事の進め方に対する神の祝福を模索することはできないので、それゆえに、我々は公的な場と、我々個々人の家族内や個人の振る舞いの両方において、我々自身のために、また、我々についてくる者たちのために、また、我々のもとにあるほかのすべての者のために、あくまでもキリスト教徒の自由の範囲内にとどまり、敬虔さ、冷静さ、正義、また、我々が神と人々に負っているすべての義務に関して、他の人の模範となるように努力することを固く約束するのである。

そして、我々のこの結合が侵害されることなしに守られるようにするために、我々は生きている神¹⁸⁾、すなわち、我々の心の探索者に目撃者になってもらうように呼びかけるのである。そのお方は、これが我々の真実の願望であり、偽りのない決心であることを知っている。我々は将来、最後の審判の日に、神の永続的な怒りを買う可能性があるもとで、また、恥辱を受ける可能性があるもとで、また、この世におけるすべての名誉と尊敬を失う可能性があるもとで、イエス・キリスト

18) 生きている神：たぶん、イエス・キリストのこと。

19)に対して答えることになるのだから。そして、そのために、主にその聖霊によって我々を強くし、我々の願望と事の進め方を大成功で祝福して下さるようにこの上なくへりくだってお願いするのである。宗教と正義が神の栄光のために、国王の名誉と我々すべての平和と安楽のために、この国で栄えるようにするために」

と20)。

(盟約、貴族とジェントリーに署名される)

かくして綴られた盟約は、それが提案された牧師たちに快く受け入れられた21)。2月28日、それはグレイフライヤーズ教会に運ばれた。そこに、エディンバラにいたすべてのジェントルマンが呼び集められた。ヘンダーソンとヘンダーソンよりもさらに情熱的なディクソンという名の牧師が、疑念を表したすべての者に対して満足を与える準備を整えていた。批判するために前へ進み出た者はほとんどいなかった。その少数の者も容易に説得された。午後4時、どんよりと曇った冬の夕方、貴族たちがサザーランド伯を先頭にして署名を始めた。それからジェントルマンが一人、また一人と署名を始め、それは8時までかかった。

(3月1日)

次の日には、聖職者がその同意を表すように呼び集められた。ほとんど300人分の署名がその夜の前に集まった。自治都市の代表も同時に署名を行った22)。

(3月2日、人民による署名)

3日目には、エディンバラの人民が、盟約によって表された大義に対して忠実であることを証明するように求められた。これまで長らく、この誉れ高い羊皮紙がいかにしてグレイフライヤーズ教会から運び出され、教会の中庭の墓石の上に置かれたか、そして、涙を流す群衆がその周りに詰めかけ、その数はとても一つの建物の中に入りきらないほどだったことが語られてきた。厳格なスコットランド人の気質が情熱には

19) 最後の審判の日には、イエス・キリストによって裁かれる。(ref: ヨハネ 5・22)

20) 原注: *Large Declaration*, 57. (HE8, 332)

21) 原注: *Roths*, 71. (HE8, 333)

22) 原注: *Ibid.* 79. (HE8, 333)

じけるときがあった。それは南部の種族の熱狂に比べればそれほど情熱的ではなかったが、それでもより持続的であった。1人1人の男女が順番に前へ出てきて、右手を天に向かって上げ、そのあとペンを握るという動作が繰り返されていると、自分たちの宗教が押しつけがましい侵害から完全に解放されるまでは、自分たちの仲間の中には1人の怯む者もないということがその皆にはわかっていた²³⁾。

現代の語り手は、どうしてもその場の絵画的な美しさに関心がいくであろう。エディンバラ城の暗い岩を背景とした教会の中庭、そこに集まった真剣な顔の人々。しかし、17世紀の人々は、地面や空のことなど考えている余裕はなかった。彼らが見たものは、自分たちの国の信仰が踏みにじられたことであり、彼らを感じたことは、長らく道に迷っていた者がついに自分たちの魂の羊飼い、主教のもとに戻ってきたときの嬉しさであった。

23) 原注：一般人による署名のことについては、同時代の資料で書かれたものがない。2月28日と3月1日はあまりにも一杯だったと思われる。よって、筆者はそれを3月2日に割り当てた。もっとも、それを直接示す資料はない。(HE8, 333)

(3)その反応

(2月28日、トラケアーの手紙)

スコットランドにトラケアーほど国王の愚かな頑固さを悔やむ理由のある者はいなかった。彼は署名がなされた最初の日に書いている。

「多くのことについて不満が述べられました。しかし、新祈禱書が彼らをもっとも悩ませているのです。(彼らは、それはこの布告24)によって、そして、国王がそれを自分自身に引き受けられたことによって、事実上新たに裁可されたものと見なしております。) 私が思うには、新祈禱書をこの国に定着させるということは、カトリックのミサ典書をこの国に定着させるのと同じくらい難しいことです25)。その使用を今のところ促さないだけでは彼らを満足させることはできません。なぜならば、彼らは、使用を遅らせることは、ただ単に後日、もっと都合のよいときにその使用を促すための準備の期間を与えるだけだと思うからです。そして、誓って申し上げるのですが、この国にはそれを強制するだけの力はないと思います。誰が新祈禱書について、あるいは、国王の命令に従おうとする臣民の気持ちについて、陛下に以上と異なる説明をしていたとしても、今やすべて者が己の役割を果たすべき時なのです」

と26)。

(3月1日、スポティスウッドの意見)

24) 2月19日にスターリングで読み上げられたチャールズからスコットランド人民への布告。その中で彼は、自分が新祈禱書の発行に関して責任を負っていると述べている。

(本章 5 頁, 原書 327 頁参照)

25) ここは、原書は「新祈禱書をこの国に定着させることは、カトリックのミサ典書をこの国に定着させるのと同じくらい簡単なことです」となると思われるが、これは、チャールズ1世があまりにも簡単に考えているので、その皮肉として言っているのではないかと想像した。カトリックのミサ典書をスコットランドの土壤に定着させることなど今さら不可能なことである。それくらい新祈禱書をこの国に定着させることは難しいことなのだということを暗に言っている。

26) 原注: Traquair to Hamilton, Feb. 28, *Hardwicke S. P.* ii. 99. (*HE8*, 334)

このような見解はトラケアーだけに限られたことではなかった。大主教のスポティスウッドは、主教たちの意見を代表して、枢密会議に対して、「新祈禱書が公に撤回されない限り、平和は訪れない」といった。

(3月2日、枢密会議の意見)

枢密会議自体も同じ意見であった。そして、自分たちの内から一人を急派した。国王に臣民の声に耳を傾け、最近起きたいくつかの騒擾のもととなった命令をすべて、その効力を一時停止にするように嘆願するためであった²⁷⁾。

(聖職者集会と議会の開催が要求される)

しかし、こうしたアドバイスがすぐに聞き入れられたとしても、スコットランド国民をなだめることはほとんど無理であっただろう。盟約は、国民的宗教の法的基盤として聖職者集会と議会に訴えていた。忌まわしい命令の撤回だけではもはや十分ではないだろう。聖職者集会と議会が開催され、こうした命令が完全かつ言語道断的に違法であることが宣言されなければならなかった。

(チャールズ、譲歩したがらず)

枢密会議のより控え目の要求でさえも、チャールズの心の中のどうやら克服しがたいように見える抵抗にあった。彼はよくわかっていた。彼の決断に含まれることはスコットランドの運命だけではないことを。彼は、周りのイングランド人がすでに北部の不満分子たちと連絡をとっており、エディンバラで起こった例がいつかロンドンでも起こることを望んでいると信じていた。(おそらく本当のことであっただろう。)彼のスコットランド人召使いたちは、自分たちの同胞に対する共感を欠いてはいなかった。そして、一つの気の毒な例がつくられた。

(3月11日、アーチャー・アームストロング、宮廷より追放される)

国王の道化アーチャー・アームストロング²⁸⁾は、酔っぱらっている状態で、ロードに向かって、「修道士、ならず者、裏切り者」と口汚くののしった。ロードは無分別

27) 原注：枢密会議の記録からの抜粋は *Baillie*, i. 458. (*HE8*, 334)

28) Archibald Armstrong (d.1672) 宮廷道化。(ref: R. Malcom Smuts, *Armstrong*,

にそのことを国王に言いつけた。すると、その運の悪い道化は枢密会議に呼ばれ、「上着を耳まで引っ張り上げ、国王への奉仕から解かれ、さらなる罰を受けさせるために星室庁へ送られるべし」との宣告を受けた。星室庁は、おそらくアーチャーが鞭でしこたま打たれるように命令していただろう。しかし、ようやくロードが介入してきた。アーチャーは鞭打ちから逃れることができた29)。

(イングランドのアドバイザーたちはロードを責める)

しかし、アーチャー以外にもロードに対して不満をもっている者たちがいた。ロードが国王に対して、スコットランド人の要求に応えることを拒絶するようにアドバイスしたからである。枢密会議でイングランドの枢密会議官たちは、自分たちは自分たちにアドバイスが求められていないことに関しては責任がもてないといった。しかし、その言葉は国王を苛立たせただけだった。なぜならば、枢密会議官たちは国王がロードの言いなりで動いていると思っているということがはっきりしたからである。国王は怒気を込めた声で彼らに請け合った。自分はこれまでにスコットランドのことに関してイングランド人のアドバイスを受けたことはない30)。

(国王の先延ばし)

チャールズの先延ばし政策が彼独自のものであることは、何の証明も必要としないことであった。来る週も来る週も何の決断もなされないまま過ぎていった。

Archibald [Archy], DNB)

29) 原注： *Council Register*, March 11, 17. Garrard to Wentworth, March 20, *Strafford Letters*, ii. 152. *Rushworth*, ii. 47. (HE8, 335)

30) 原注： Zonca's despatches. March 23, 30/April 2, 9, *Ven. Transcripts, R. O.* (HE8, 335)

(4)盟約派の動き

(4月、盟約が広められる)

盟約派はそのように怠惰ではなかった。4月の終わり頃までには、スコットランドのほとんど全体が彼らの大義のもとに集まっていた。どの町でも、どの村でも、どの奥まった場所でも、もっとも有力な地主、もっとも雄弁な説教師が、喜んでその主張に耳を傾ける用意があった。

(スコットランドの抵抗)

このような運動においては、多くがそのリーダーによって用意される組織の卓越性に帰せられるべきであることは間違いない。また、使われた理由付けの大部分は批判的な検証に耐えられるものではないだろう。チャールズの新祈禱書は、たしかにそれについて言われているすべての厳しいことに耐えられるものではなかった。しかし、それでもやはりスコットランドの抵抗は、アザミのモットー³¹⁾に忠実であろうとする決意の結果であった。スコットランドは、宗教や政治における新しいアイデアの創始者として目立ったことは一度もないが、頑健で活力のある民族にもっとも必要な資質、すなわち、外部の力によってそうならされるのではなく自分自身でそうならうとする決意をもっていることは常に示してきた。スコットランド国民は、13世紀に政治的独立のために大きな犠牲を払うことを選択した。そして、17世紀にその教会の独立のために大きな犠牲を払うことを選択したのである。そのために、教養ある知性からの幅広い共感を棄て、ジュネーヴから借りてきた固定的な教義に合わないあらゆる形式の霊的宗教に対して、火打石のように心を固くしたのである。カルヴァン主義では、個人の良心の自由はほとんど考慮されなかった。その説教師は、不変の掟を説くことを求められていると感じ、彼らが説いた掟は、信徒の声の中において彼らのもとに戻ってきた。多くの人々の中には、システムによって自分たちが制限されているという感覚はなかった。しかし、少数の人々にとっては、それは耐え難い専制となった。すなわち、それは当時国民が通過しつつあった危険な時期において、通常以上に強く感じられる専制となるであろう。

31) アザミのモットー：Nemo me impune lacessit（何人も咎無く我を害せず）つまり、無理にさわろうとすれば必ず^{とげ}棘が突き刺さるということか。（ref: Wiki, Eng, ‘Order of the Thistle’）

(署名を拒んだ者の扱い)

盟約を拒絶するという事は、単に信念において多数と異なるというだけではなかった。それは国に対する裏切りであり、まもなく南部に集結しようとしている外国の侵略に対して手を貸そうとすることであった。なおも署名しないでいる者たちは、暗い顔と脅かすような仕草で対応された。当時のことをよく覚えている者は次のようにいう。

「署名する者が増えれば増えるほど、彼らはより横柄になり、署名を拒んでいる者から無理やり署名をとろうとするようになり、それがだんだん侮辱的になり罵倒するようになり、署名を拒絶した者の中には脅かされて、打ちのめされた者も出た。それはとくに大都市において顕著であった。エディンバラやセント・アンドリュース、グラスゴー、ラナーク、その他多くの都市であった。ジェントルマンや貴族は、盟約の写しを旅行かばんやポケットに入れて持ち運び、盟約への署名を求め、友人たちに署名させるべく最大限の努力を払った。盟約は、公の場においては教会において署名され、牧師が人々に署名を勧奨した。また個人的な署名宣誓も行われた。すべての者が宣誓する権利を有し、盟約に参加することが許可され歓迎された。そして、意欲のわいた者は誰でも、盟約を持ち運び、署名宣誓を行うことを希望する者に対して宣誓を執り行う権利と許可を有した。署名する者の多くの熱意はたいそうなものだったので、しばらくの間は涙を流しながら署名する者も多かった。また、中には自分の血をとって、署名するときにそれをインクとして使用する者もいたという報告も常になされている。盟約をもっとも擁護する牧師は、あまりにも熱心に、しかもあまりにも頻繁にその話が聞かれたので、教会は都市においては聴衆を収容し切れなかった。(中略)無節操なことに、盟約のどの点においてもびっくりして、その意味にとってやや破壊的になる抗議によって応じるような人々にも盟約が与えられた。その結果、十分な署名が得られ、しまいには署名を拒絶している者は、署名した者たちによってローマ・カトリック教徒も同然と見なされるくらいにまで至った」

と32)。

(デイヴィッド・ミッチェルのケース)

32) 原注：Gordon, 45. (HE8, 337)

訳注：Gordon, ii. 45. という事か。

命令によって宗教を変えることを拒絶した国民に荣誉が与えられるならば、たとえいかなる良心的動機があつたにせよ、平和のために、虚偽に署名することを拒絶した者たちにも荣誉が与えられるべきである。そのような者たちは、命の危険を感じながらエディンバラの町の通りを往き来した。国教会忌避の牧師の一人デイヴィッド・ミッチェルは、剣を抜いたジェントルマンたちにつきまとわれた。「ローマ・カトリック教徒の奴がいたとはな！」という叫び声が彼に投げかけられた³³⁾。しかし、それでも注目に値することは、こうした脅しがこれ以上何も悪いことに結びつかなかったことだ。いかなる流血も、公然の戦争の場合を除き、盟約の大義を汚さなかった。

(国民の事実上の団結)

事実上、国民は一つになっていた。ごく少数の地主がこの運動から超然としていた。また、聖職者のうちごく少数は警鐘を鳴らした。ホーソンデンのドラモンド³⁴⁾のような学者たちは、民衆の感情の爆発が自分たちの静かな学究生活を妨げないか恐れた。自らの信念に反して署名した者たちもいた。また、自分たちがした約束の意味がわかってなくて証明した者はもっといた。しかし、全体としては、国民は強い興奮の影響のもとで前方へ傾いていった。ちょうどトウモロコシ畑の穂が風にたなびくように。

33) 原注：Michell to the Bishop of Raphoe, March 19, *Baillie*, i. 263. (*HE8*, 337)

訳注：*Baillie*, i. 463 か。

34) William Drummond of Hawthornden (1585-1649) 詩人、パンフレット著述者。(ref: Michael R. G. Spiller, *Drummond, William, of Hawthornden*, DNB)

(5)チャールズの動き

(チャールズが盟約について考えたこと)

国王にとって、スコットランド人の盟約はピューリタニズムの主張よりもはるかに大きなものであった。その彼自身から議会と聖職者集会への訴えかけによって、それは彼の目にはまさに共和政の宣言のように見えた。もともと、彼はそのような言いがかりに対して最大限に抵抗するつもりではいたが、彼が必要としている力をどこから得たらよいのかわからなかった。彼はイングランドにおける不満がどれくらい深いものかほとんどわかっていなかったが、この大義においてはあまり熱心に戦おうとは思わない臣民がたくさんいたことに気づくくらいには十分なことを知っていた。彼には軍隊がなかった。すなわち、訓練を受けた兵士の集団で、世論とは独立した戦う用意ができていたという意味での軍隊である。また、彼の艦隊は、軍隊を支援するために使われない限りは、あまりものの役には立たないだろう。

(4月13日、ノーサンバランド、海軍提督に)

海軍の組織を改善するために何かをすることが少なくとも可能であった。バッキンガムの死に際して設置された海軍委員会はまだ稼働中であった。チャールズはおそらく彼の2番目の息子ジェームス（彼はその息子をヨーク公に列した。そして、まだ5歳に過ぎなかった）が、海軍卿としてその任務を遂行できるようになるまでは稼働させているつもりであっただろう。紛争が近づいていることに鑑みると、そのほかの何らかの措置をとることが必要であった。ゆえに、ノーサンバランド（前年の航海で艦隊を指揮していた）が、国王が望むだけの間、海軍卿に任命されることになった。と同時に、若き王子にその役職を譲渡する法律文書が作成され、枢密会議の書類^{だんす}筆筒の奥深くに保管された。国王がそれを執行させたいと願ったときはいつでも引き出せるようにするためである³⁵⁾。

(5月、チャールズ、交渉することに決める)

ノーサンバランドは任命を受けてから間もなく病気になった。ゆえに、自分自身では艦隊の指揮がとれなくなってしまった。しかし、たとえそうでなかったとしても、

35) 原注：Northumberland's appointment, April 13, *Patent Rolls*, 13 Charles I. Part 38, *Council Register*, April 18. (HE8, 339)

艦隊が参加できるような戦争計画は何も立てられていなかった。チャールズは外交に頼った。彼が効果的に事に介入できるまで、時間を稼ぐことが必要であった。しかし、これまで非常にしばしば考えられてきたように、チャールズが決して自分ではするつもりのない譲歩をスコットランド人に提供することによって、彼らを欺くことを決意したのだと考えることは、彼の人格と立場を見誤ることになるだろう。彼は、前年の夏取った立場³⁶⁾を放棄しなければならないことはわかっていた。しかし今、次の2点を提案すれば、すなわち、高等宗務裁判所を手直しすることと、王が宗教または法律においていかなる変革も意図していないということを臣民に納得させるような公正かつ合法的な方法以外では、教会法と祈禱書を押しつけるつもりはないということを保証することを提案すれば、それで十分ではなかろうかと考えるようになっていたのだ。チャールズは、そこまでは譲歩する用意ができていたのだ。しかし彼は、スコットランド人はそれでは満足しないだろうと強く考えていた。少なくとも彼らのリーダーたちは、国王の合法的な権威までもかなぐり捨てようとしていると信じていた。ゆえに、国民盟約が反乱の旗印として放棄されなければならなかった³⁷⁾。スポティスウッドはいみじくも、「そのような要求はすべての交渉を不可能にするでしょう」と国王に告げた。すると、国王はそっけなく答えた。「盟約が放棄されるまでは、私にはヴェネツィア公と同様権力がないのだ」と³⁸⁾。彼は、自分の要求は正しい要求であるとはっきりと信じていた。もしもスコットランド人が同様に考えないとしたら、それはスコットランド人が悪いのだと。そのような要求をするだけでも、それは自分に準備を進める時間を与えるであろう。もしもそれが自分の有利になるとしたら、責められるべきはそのような理にかなった条件を拒絶した彼らのほうであろうと。

36) 前年の夏取った立場：つまり、新祈禱書は絶対に受けて入れてもらうということ。

37) 原注：Burnet, *Lives of the Hamiltons*, 43. (HE8, 339)

38) 原注：*Ibid.* 46. (HE8, 339)

訳注：ヴェネツィアでは、寡頭支配が強まるにつれて、権力はヴェネツィア公爵以外の者へと分散されてゆき、公爵は単なる代表的なものに陥っていったようである。チャールズが盟約の存在を彼の王権を弱めるとも考え、排除に乗り出していることがわかる。(ref: Wiki, Eng, 'Doge of Venice')

(6)ハミルトン登場

(ハミルトン、国王の特別代理人として赴く)

交渉の申し入れの伝達者として、チャールズはハミルトン³⁹⁾を選んだ。王はもう長年の間、スコットランドに関してはすべてこのハミルトンに相談していた。

(彼の人格)

ハミルトンは、当時存命の者の中でもっともチャールズの信頼を勝ち得ていた。そしておそらく、彼に割り当てられた難しい仕事をやるのもっともふさわしくない者であっただろう。ハミルトンがスチュアート王家の次の継承者として、主君のスコットランド王座に座りたがっているという、当時の人々によってしばしば彼に向けてなされた^{けんせき}譴責は、何の根も葉もないことである⁴⁰⁾。我々がハミルトンについて知っていることからすると、彼はチャールズに個人的に温かい感情を抱いていたということになる。しかし、たとえ個人的に温かい感情でも、他の激しい感情によって容易に曇らされるだろう。騎士道精神あふれるラヴレス⁴¹⁾が意中の婦人に、「名誉をより愛するようになって初めて、私はあなたのことをこんなに愛することができた」⁴²⁾と行って安心させるとき、彼は男女間の関係以外の人生の関係において有効な原則を提示したのである。すなわち、個人的な賞賛や個人的な交流の快適さから生じる愛着は、どうしても中断されたり、朽ち果てたりするものなのである。一方、共通の目的

39) James Hamilton (1606-1649) スコットランドの貴族、政治家。1625年、3代目ハミルトン侯。(イングランド貴族として2代目ケンブリッジ伯。)1643年、初代ハミルトン公。本文当時は侯爵。(ref: John J. Scally, *Hamilton, James, first duke of Hamilton*, DNB)

40) 原注: See Vol. VII. p. 182. (*HE8*, 340)

訳注: ジェームス・ハミルトンとチャールズは、スコットランド王ジェームス2世(1430-1460, 在位1437-1460)を共通の祖先とする。1612年にジェームス6世/1世の王太子ヘンリー・フレデリックが亡くなったとき、スコットランド王位の継承順位は①ジェームス6世/1世の次男チャールズ、②ジェームス6世/1世の長女でチャールズの姉のエリザベス、③ジェームス・ハミルトンだった。

41) Richard Lovelace (1617-1657) 詩人。士官。(ref: Raymond A. Anselment, *Lovelace, Richard*, DNB)

42) To Lucasta, Going to the Wars よりの詩句。(ref: 平井正穂編、『イギリス名詩選』(岩波書店, 1990)(岩波文庫); pp. 90-92)

を意識したり、そのために犠牲になることをいとわない共同体から生じる愛着は、そのような危険に陥らない。ウェントワースの持続的な忠誠心は、チャールズの中に慈しみ深い主権者を見るだけでなく、偉大な政治原則の象徴を見るのである。一方、ハミルトンの忠誠心は、チャールズの中に盲目的に献身的な主君の姿を見た。その主君は彼の個人的な財産の大部分の創設者であったのだ。彼は国王の権威を支持し、維持することを願った。しかし、彼はその権威のもとに隠れて、自分自身の財産や地位を育てていくことをもっと願った。彼は国王に仕えるだろう。しかし、完璧な心でもって仕えることはできなかった。彼は国王のおかげで高い地位についていた。その地位によって彼はほかのスコットランド臣民とは分け隔てられていた。また、仲間の貴族からの嫉妬にさらされていた。しかし、家族からの永続的なサポートや広大な地所、支持者や従者たちからの愛着心は、工場から出る煤煙によってまだ曇らされていない空のもと、クライド川⁴³⁾が流れる肥沃な流域に見出されるべきである。彼の心のすべての感情、権益のすべての要求が彼に争いの仲介者になるように促した一方で、容易に彼の目的達成を、おそらく彼の公平性に対する名声は高めるかも知れないが、争いの当事者の一方によって付託された大使としてはまったくふさわしくない方法で、追求しようと思うようになるかも知れなかった。

(彼の紛争の宗教的側面に対する無関心)

争いの宗教的側面に対しては、ハミルトンはすこぶる無関心であった。スコットランド人が大人しくしてさえいれば、彼は彼らが新祈禱書から祈りの文句を唱えようが唱えまいがかまわなかった。それは賢さからくる無関心ではなく、軽蔑からくる無関心であった。ハミルトンはまさに妥協を唱道する人物であったが、一方で、どのような条件でそれが可能かは見極めようとしない人物であった。彼は日々、自分の立場を変えるだろう。なぜならば、彼は係争関係にある両当事者のどちらの原則も支持しない一方で、自身はあらゆる偶然の出来事の魅力や逆に嫌悪から自分自身を守るための原則というものをもっていなかったからである。

(彼の暗く沈んだ気質)

43) クライド川 (the Clyde) : クライド湾 (Firth of Clyde) に注ぐスコットランドで9番目に長い川。ハミルトン族の勢力地だったラナークシャーを通る。(ref: Wiki, Eng, 'River Clyde')

この決まった原則の欠如が、彼にとっては無意識のうちにはあるが、あの悪名高い暗く沈んだ気質の中に表れているという可能性も少なくはないであろう。彼が何かを手がけると、必ず「成功するには計画の全面的改訂以外にはありえない」という結論にすぐに至ってしまうのだ。彼は頻繁に戦争と外交に従事したが、戦争に従事するときは必ず、交渉にしたほうが手に入れたいものが手に入るという絶対的確信に至った。一方、彼が外交に従事しているときは、戦争こそが、そして戦争によってのみ、彼が交渉によって手に入れてくるように派遣された目標に到達することができるという確信を得た。

(ハミルトン、成功を絶望視)

ハミルトンはイングランドを出発する前からすでに、自分の仕事の難しさを感じていた。彼はコンに、「私は喧嘩にならずしてとても事の成功を望めない。スコットランド人は悪魔にとりつかれている。神の判断は、交渉の中において見られるであろう。なぜならば、国王は彼らを赦し、彼らがしてほしいことをする準備ができていのに、彼らは相変わらず新しい要求を出し続けており、さらに今、『盟約に署名した者は、国王の特別代理人に会ってはならない』という命令を発したからである」と44)。

44) 原注：Con to Barberini, June 1/11, *Add. MSS.* 15,391, fol. 164. (*HE8*, 341)

(7)ハミルトン、スコットランドに到着する

(6月4日、スコットランドに到着する)

それはまったくその通りであった。ハミルトンが知らされたのは、ハミルトンは盟約派のリーダーたちと交渉しなければならず、彼らを飛び越えて直接、盟約に署名した者たち一般に話しかけてはならないということだった。ダルキースが交渉の地として指定された。

(リース港に到着した弾薬船)

そこに到着する前、彼に新たに屈辱を与える出来事が起きた。一隻の船がリース港に到着して、その船はエディンバラ城の守備兵に供給するための戦備品を積んでいた。エディンバラ城は当時、マー伯⁴⁵⁾によって指揮されていたが、ハミルトンはこれを国王のために確保したいと思った。しかし、盟約派はその船が積み荷を陸揚げすることを許さないだろう。結局、トラケアーが積み荷を船に乗せて運び去り、ダルキース・ハウスに収納した。すると、盟約派のリーダーたちはすぐに、そのような危険な場所の近くまで行くことを拒絶した。そして、火薬の搬入を妨げるためエディンバラ城の周囲に警備隊を置いた⁴⁶⁾。

(6月5日、ハミルトン、ロシスと会見)

6月7日、ハミルトンは状況について説明することができた。彼はロシスと会見の場をもち、そこで彼に、もし自分がもたらした条件が拒絶されれば、国王は4万人の軍隊をあとに従えながらスコットランドにご自身で来られるであろうと伝えた。ロシスは恐れたようには見えなかった。そして言った。スコットランドはただ、自分たちの宗教がしっかりと確立され、いかなる者もあとから好きなようにそれを改変できないようにすることのみであると⁴⁷⁾。

(6月7日、ハミルトンの状況説明)

45) John Erskine, 3rd Earl of Mar (c.1585-1653) スコットランド貴族。盟約派を支持した。(ref: Vaughan T. Wells, *Erskine, John, nineteenth or third earl of Mar*, DNB)

46) 原注: *Roths*, 112, 129. (*HE8*, 342)

47) 原注: *Ibid.* 135. (*HE8*, 342)

ハミルトンはイングランドを出発する前、彼がスコットランドで公開することが期待されている宣言の二者択一の形式を受け取っていた。一つには、盟約が放棄されることが明確に書かれていた。もう一つの中では、それは服従を説く曖昧な表現の中に含まれていた。ハミルトンは今国王に、宣言を読むことが可能なのは後者の形式においてのみだと保証した⁴⁸⁾。盟約派は、聖職者集会と議会によってパース条項を含む忌まわしい形式を廃止して、主教の権限に制限を置くことをしないと満足しないであろう。ゆえに国王は、国王軍を率いてスコットランドを攻めなければならなくなる。国王は必ず勝つであろう。しかし、おぼえておかなければならないことは、それは自分自身の貧しき人々に対して勝利を収めることであり、おそらく王は、彼らの狂気に目をつぶりたい気持ちのほうが強いであろう。その狂気が続く限り、彼らは盟約を放棄したり、あるいは、彼らの要求（それは出過ぎたものであり罰当たりなものであるが）から離れたりするよりは、死んだほうがましだと思うであろう。もしも彼らが国王に譲歩を強いることができなければ、彼らは自分たちで議会を召集するであろう。そして、ハミルトンは付け加える。「安心なさいませ。彼らには急いでどちらもやらせません⁴⁹⁾。なぜならば、私は力でできないことを、知恵を使って行うからです」と⁵⁰⁾。

(6月11日、国王の指示)

ハミルトンはおそらく彼の知恵を使って国王をおどかして、さらなる譲歩を引き出そうとしていたのではないかと思われる。それだけが、和平の可能性を提供しように思えたからである。しかし、チャールズは別に何とも思わなかった。彼は準備を急いでいると答えた。そして、続けていうには、「その間あなたの関心は、どうしたらその群衆を解散させることができるかになければならない。そして、もしできるならば、本来は私の城であるエディンバラ城とスターリング城を占領してほしい。私は別にそのことは期待していないが。そして、上記の目的のために、私はあなたに、彼らに彼らが喜びそうなことを何でも言ってよいと許可する。私の立場に反することを約

48) 原注：私は、これが宣言を分割することによって彼が意味していることだと考える。いずれにせよ、これが2日後に彼が決めたことである。

49) どちらもやらせません：つまり、彼らには国王に譲歩させることも議会を開かせることもやらせない。

50) 原注：Hamilton to the King, June 7, *Hamilton Papers*, 3. (HE8, 343)

訳注：国王が軍隊でもってしようとするのを、ハミルトンは知恵でもってすることができる。

束しなければ。とくに、あなたは議会の召集または聖職者集会の召集に同意してはならない。彼らが盟約を破棄するまでは。そして今、あなたの主要な目的は、私が彼らを鎮圧する準備ができるまでは、彼らが間違っただけを犯さないようにするための時間を稼ぐことである」と51)。簡単にいえば、主要な点においては、譲歩はまったくなかったのである。ただ、それほど重要ではない点においてのみ、ハミルトンはできるだけ交渉を引き延ばすことになっていた。

51) 原注：The King to Hamilton, June 11, *Burnet*, 55. この手紙は6月7日付のものに対する返書である。その始まりにおいて言及されている6月4日付のものに対するものではない。(HE8, 343)

(8)ハミルトン、エディンバラに入る

(6月8日、ハミルトン、エディンバラに入る)

この手紙が書かれる前に、ハミルトンはエディンバラに入っていた。町中の人々（その数は田舎から流入してきた多数の人々によって膨らんでいた）が彼を迎えているように見えた。彼は、「少なくとも 60,000 人が沿道に並んでいた」と報告している。また、500 人の牧師が黒衣に身を包んでそこにいた。牧師たちは公の前でハミルトンにスピーチを行い彼に挨拶しようとしたが、彼は、それからは逃れ、直接ホルロード宮殿へ向かい、そこで彼らの話を内々に聞こうとした。ハミルトンは自分が町に迎え入れられたことに満足し、国王に、エディンバラで何ができるかを見極めるまでは、戦争準備を延期するように求めた。たしかに盟約派は、すぐには盟約を放棄しないであろう。しかし、そこまでには至らなくても他の譲歩を引き出すことが可能であろう⁵²⁾。

(6月15日、ハミルトン、落胆する)

一週間もしないうちに、ハミルトンは、こうした修正された希望できえもあまりにも楽観的過ぎることに気がつかされた。彼は、枢密会議官までもが盟約は法律によって正当化されるべきだと明言していると報告している。また彼は、「それは君主制にとっては非常に危険なものなので、私には彼らがどのように団結するのかまだよくわかりません」とも付け加えている。とにかくなされるべきことは、国王がそれを打ち砕く準備ができるまでは、その不可避の反乱を避けることである。ハミルトンは、たとえ端折られた形でも宣言書⁵³⁾をあえて公開することはしていなかった。すぐに聖職者会議と議会を開くこと以外は何も盟約派を満足させないであろう。それ以外のいかなる条件でも交渉を続けることは困難であった。また彼は、国王側の抵抗が成功する可能性についても等しく希望を持ち合わせていなかった。ハミルトンはすでにハントリーやその他国王に忠実な若干の貴族を彼らの地元に送り、抵抗の核を形成させようとしていた。ロード・アントリム（マクドネル族の一員として、西ハイランドにおける土地の所有権を主張していた）が、アイルランド軍を連れて国王の支援に来るかも知れなかった。しかし、直近の展望はきわめて暗かった。エディンバラ城の占領を

52) 原注：Hamilton to the King, June 9, *Hamilton Papers*, 7. (HE8, 344)

53) ハミルトンはイングランドを出発する前、彼がスコットランドで公にすることが期待されている宣言の二者択一の形式を受け取っていた。(本章 25頁)

期待することは無駄であった。あまり安心させる材料はなかった。ハミルトンは書いている。「私は、神様は必ず私たちを勝利させて下さると思っています。しかし、それは非常に難しい仕事であり、流血を伴うことでしょう」と54)。

(6月16日、ハミルトン、盟約派は盟約について釈明を行うべきだと提案する)

次の日、ハミルトンは困難から脱する新たな方法を提案した。すなわち、盟約派は、国王の権威を侵したいと思っているのでは毛頭ないという釈明を盟約に付け加えられないだろうか55)。

(6月20日、チャールズ、戦争の準備をする)

しかしチャールズは、そのように簡単に敗北を認めてしまうことに尻込みした。いかなる釈明も、王が自分に向けられた力にうまく対処することができなかったから譲歩したという事実を隠さない。ゆえにチャールズは、戦争を準備しつつあると返事した。6週間後には大砲40門をもつ砲兵隊を編成しているであろう。ベリックとカーライルも間もなく敵の攻撃に備えて確保されるであろう。使者をすでにオランダに向けて放った。14,000の歩兵、2,000の騎兵を準備するためである。財務長官56)は、20万ポンドを用意することだったらお安い御用だと請け合った。そして今、まさに艦隊をファース湾に向けて派遣しようとしている。もしもハミルトンが、軍隊がリースに上陸できることを確実なものにすることができるのなら、6,000の兵士がその艦隊で送られるであろうと57)。

(6月25日)

数日後、チャールズはまだやる気でいた。彼は手紙に書いている。「私が言いたいことはただ1つ。盟約が効力を有している限りは、たとえそれに釈明が付けられていようといまいと、私にはヴェニス公に力がないのと同様全然力がないのだ。それだったら我慢しているよりは死んだほうがましだ。それでも、私は説明に耳を傾けてみる

54) 原注：Idem, June 15, *ibid.* 9. (HE8, 344)

55) 原注：Burnet, 58. (HE8, 344)

56) 財務長官：イングランドの財務長官ウィリアム・ジャクソン (bap.1582-d.1663, 財務長官職：1636-1641) のこと。

57) 原注：The King to Hamilton, June 20, *Burnet*, 59. (HE8, 345)

ことはよいことだと思う。とにかく時間稼ぎをするために何かをすることはよいことだと思われる。それこそが今、あなたの主要な関心事の一つであると見る」と。また彼はこうも付け加えた。たとえ盟約派が議会と聖職者議会を召集する挙に出たとしても私はそれをべつに残念だとは思わないと。なぜならば、彼らはそうすることによって、自分たちの立場をますます悪くするだけだからだと58)。

58) 原注 : Idem, June 25, *ibid.* 60. (HE8, 345)

(9)ハミルトン、帰英の話をする

(6月24日、ハミルトン、イングランドに帰ることについて話す)

ハミルトンはすでに、チャールズが思うほど時間を稼ぐことは簡単なことではないということに気がついていて、彼は、「交渉を打ち切り、イングランドに帰り、国王にもう一つ別の方針をとることをアドバイスするぞ」と脅かした。彼はついに盟約派から、ハミルトンがイングランドに戻っている間の3週間、散会し、何も事を前へ進めないとの約束を取り付けた。その間、ハミルトンは全力を尽くして国王に議会と聖職者集会を召集するように説得するとの了解のもとで。

ハミルトンはチャールズに決まったことを報告するにおいて、彼が得た時間を最大限に利用しようとした。曰く。ひとたび散会すれば、盟約派は戻ってくるときはもっと落ち着いた気分になっているでしょう。彼らは、盟約は絶対に放棄しないでしょうが、これまでよりはそれに固執しないでしょう。また彼は、ひょっとしたら起こるかも知れない戦争についても述べたいことがあった。すなわち、自分としては、陛下からのお示しがあつた6,000人の兵士の上陸計画に関しては、これを保証することができない。しかし、より少ない数の兵士であれば可能であり、それによってファイフやロジアンを攻めることができるだろうと。ダンバートンはすでに手中に帰している。また、現在マー伯と交渉中であり、エディンバラ城を自分に明け渡すようにも求めている。それでもハミルトンは、盟約派もまた積極的に動いており、大陸から自由に武器を輸入しつつあることは否定できなかった⁵⁹⁾。

(6月29日、ハミルトン、戻る許しを得る)

チャールズは返事の中で、ハミルトンが求めていたイングランドに戻る許しを与えた。そして、「特別代理人は、あとで翻さなくてはならなくなるようなことは何も約束してはいけない。ただし、法廷をエディンバラに戻し、将来聖職者集会や議会が開かれるかも知れないという淡い希望は与えてもよい」と。また一方で、「宣言書はその修正された形で、汝がエディンバラを立つ前に公表されなければならない」とも伝えた⁶⁰⁾。

(10)国王の宣言書が読まれる

59) 原注：Hamilton to the King, June 24, *Hamilton Papers*, 14. (HE8, 346)

60) 原注：The King to Hamilton, June 29, *Burnet*, 61. (HE8, 346)

(7月4日、宣言書が読まれる)

この手紙を受け取ったとき、ハミルトンはすでにイングランドに向けて出発していた。そこで彼はすぐに引き返し、7月4日、国王の宣言書がエディンバラのマーケット・クロス⁶¹⁾において読み上げられた。盟約派スコットランドは、教会法や祈禱書は、公正かつ適法な方法によってのみ強制できると知らされた。

(再び抗議)

伝令官がその仕事を終わると、すぐに抗議文がその返答として読み上げられた。盟約派は、自分たちの大義を唯一合法的に判断できるものとして聖職者会議と議会を再び持ち出した。また、彼らは次のことを指摘することも忘れなかった。すなわち、「自分たちが考えている聖職者会議とは、ジェームスによって強制的に服属させられ、彼の意思を批准させられた聖職者会議とは非常に異なるものである。自分たちの考えている聖職者会議には、主教は座る場所がない。被告人として自己の誤った行為の弁明を行うために座る場合のほかは」と。

(聖職者集会の神授権)

盟約派は、自分たちの意図する聖職者会議について、国王チャールズに仕える者がとても聞くことのできない言葉で語り始めた。すなわち、「聖職者会議を開く権利は神から直接由来するものである。いかなる地上の君主もあえてそれを妨げることはできない」と公然と述べたのである⁶²⁾。

長い論争がゆっくりとほぐれつつあった。チャールズの、臣民の宗教を自分の目から見てもっとも公正であると思われる型にはめ込もうとする要求が、宗教に対して干渉する彼の権利の断固たる否定にあったのである。

(枢密会議も宣言書に反対するほうに加わる)

このスコットランド人の感情の爆発は枢密会議の部屋にまで行き届いた。朝、国王の宣言書に正式な承認を行った枢密会議官の多くが、夜が来る前に自分たちの署名の

61) マーケット・クロス：本書 85 章 34 頁注 73 参照

62) 原注：Protestation, *Large Declaration*, 98. (*HE8*, 346)

取り消しを申し出てきたのである。これが許されない限りは、彼らはすぐにでも国民盟約に署名するつもりであった。

(7月5日)

そのような屈辱から逃れるために、ハミルトンは彼らのいる前で、彼らが承認したことを記録した紙を破り捨てた63)。

(1) 盟約派からの代表団

(盟約派からの代表団)

ハミルトンがまだ枢密会議と討議中に、盟約派の代表団が宣言書に対する抗議を行うために到着した。国王の特別代理人は断固として答えた。「枢密会議は汝らが何をしたかを知っている。そして、それに答えるであろう」と64)。

(代表団、ハミルトンから励ましを受ける)

代表団のメンバーが暇を告げて出ていったとき、ハミルトンは部屋から出て彼らを追いかけた。そして、彼らと自分だけになるや否や次のようにいったと報告されている。「枢密会議官の前では私は国王の特別代理人としてしゃべった。しかし、今は君たちだけだ。だから、私は情け深いスコットランド人としてしゃべってやろう。もし君たちが勇気と決断力でもって進むならば、君たちは望むことを実現できるだろう。もしも君たちが気落ちして少しでも譲歩すれば、それでもうおしまいだ。いいかね、一を聞いて十を知りたまえ」と65)。

63) 原注：Hamilton to the King, July 4, *Hamilton Papers*, 21. *Burnet*, 64. (HE8, 347)

64) 原注：*Roths*, 175. (HE8, 347)

65) 原注：このハミルトンの言葉はガスリーによって伝えられているところである。

(*Memoirs*, 40) ガスリーは、同じ日、その代表団のメンバーの1人だったキャントからそのことについて聞いた人物からその話を聞き、また、夕刻、同じく代表団のメンバーだったモンローズからもそっくりそのまま同じ話を聞いたと述べている。しかしだからといって、その言葉がガスリーが回顧録を書いたとき、彼によって正確に書き入れられたというわけではない。しかし、ハミルトンは二枚舌だというのはスコットランド人の間であまりにも共通に信じられていることなので、「ハミルトンは二枚舌である」ということにはそれなりの根拠がある。*Hamilton Papers* の付録 (263) に印刷されて

(ハミルトンのイングランドへの帰還)

かつてハミルトンはチャールズに、「私は力できないことを、知恵を使って行う」といっていた。ハミルトンの知恵は、その力と同様効果のないものであった。彼は自分が仕えている主君を破滅させようとしていたと考える必要はない。おそらく彼は、すべての当事者と良好な関係でいたかっただけなのだ。そして、(間違いなくその通りであったが) 一見不可避であるように見える条件を飲み込むことが、スコットランドにとってと同様チャールズにとっても上策だろうと考えていたのである。このようなことを考えていたので、チャールズがスコットランド人をおどかして彼らに降伏させるか、あるいは、スコットランド人がチャールズをおどかして彼に譲歩させるかは、ハミルトンにとってはどうでもいい問題であった。前者のパターンはまったく無理そうに思えたので、ハミルトンは今南に向かい、チャールズのほうが臣民よりもたやすく譲歩してくれるだろうとの展望をもっていた。ハミルトンはチャールズを促して聖職者集会と議会の開催を承諾させ、それらの機関が近時なされた宗教的変革に対して法的非難を行うことを許させ、さらに、将来の主教を聖職者総会のコントロールのもとに置くことさえも許可させようとしていた。しかし、チャールズがそんなに多くのことを譲歩するかは大いに疑われることであっただろう。しかし、スコットランド人がそれ以下のことには同意しないことは間違いなく疑いがなかった。

いる興味深い話のイングランド人著者は、「ハミルトンは自分と同郷の者である代表団の者たちに、イングランド人に(中略)自分たちの権利を侵食されないようにするために、自分たちの原則には忠実であれとアドバイスしているのである」と述べている。

訳注：*Guthry's Memoirs* に関しては拙訳『大内乱史Ⅱ下』27頁注55訳注参照。